

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	サドのイタリア紀行
Author(s)	横田, 伴裕
Citation	フランス文学 , 25 : 25 - 33
Issue Date	2005-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041067
Right	
Relation	



サドのイタリア紀行

横 田 伴 裕

われわれがサドを読むのはその作品の特異性に引きつけられてのことなのであるが、では、無神論や性欲礼賛といったよく知られた特異性を発揮するよりも以前のサドを読むとしたらそれはどのような関心からなのであろうか。また、サディズム命名のもととなった作品群を生み出した作家の、そうした傾向とは縁遠いものと見える作品を読むことにどのような利点があるのだろうか。作家サドの出発点以前に位置する『イタリア紀行 *Voyage d'Italie*』と題された旅行記のための草稿を読むために、こうした一般的な問いを立てておくことはある程度の価値があるように思われる。というのも、まず一つ目の問いについてであるが、まだ作家としての意識が希薄な頃の著作を読むときに、そこに後々の作品群を読むことで養われた目をもったままさかのぼって接するとすれば、結果の如何はともかく、態度としては公正なものとはいえず、その作品が示す作者の姿、作品そのものの姿を歪めてしまうことになるだろうからだ。また、二つ目の問いについていえば、サドとその作品に無神論や性欲礼賛の言葉を読みとるにせよ、そこから離れてサドとその作品の知られざる側面、真新しい側面を検証するにせよ、いまだにわれわれがサドを読むなによりのきっかけであるその過激さを無闇に言挙げしたり遠ざけたりせずに読む態度が必要であろう。そしてそうした態度が要求されるのはまさに『イタリア紀行』のような著作においてであって、そこから改めてサドの読解が始められるべきであらうからだ。

つまり、『イタリア紀行』を読むのは、サドのサドらしい作品をより公正な視点で読むための再準備作業になるであらう。

*

ではまず、『イタリア紀行』がどのような作品であるかを見てみよう。

サドの後半生は監獄や治療施設を盪回しされるまさに監禁状態のうちにあったわけだが、それ以前、サドは二回のイタリア旅行を行っていた。一回目は1772年末頃の3ヶ月ほどのあいだに、そしてそれより少し間をおいて1775年7月からほぼ一年にわたって行われた。そのどちらもがフィレンツェ、ローマ、ナポリを中心としてその周辺が滞在地に選ばれている。これらの旅行は実はただの旅行ではなく逃避行

としての性格をもっていた。というのも、一回目のイタリア行きは度の過ぎた「遊び」に対して被害者からの告発を受けて審判がくだされて死刑判決を受け、それから逃げ出そうとしてイタリアへ向かったからだ。また、二回目にしても、一回目のイタリア滞在中に逮捕されてフランスに連れ戻されて拘留されていたところを逃げ出し、追っ手から身を隠そうとして再びイタリアに向かったのであった。二回目は自らの意志で帰国し、居城のラ・コストに戻った。しかしその後パリで逮捕され、ヴァンセンヌに投獄されたのである。

ところで不思議なのは、なぜ逃避行の地としてイタリアが選ばれたのか、ということだ。本当に逃げる気があれば、サドの敬愛するヴォルテールにならってイギリスに行くこともできたであろうし、そのほかの国も考えることができたであろうに、捜査のおよびやすい隣国へわざわざ逃げたりしたのであるか。

それはひとまず措くとして、そうした「旅行」から『イタリア紀行』という作品が生み出されたのであるが、これは作家の生前には日の目を見なかった。旅行中からメモをとり続け、監禁生活が始まってから改めて筆を起こして具体的な執筆活動が始まった。そのためにイタリア滞在中に知り合った友人たちや妻に求めて資料を集め、また妻や家来の手を借りて原稿の整理などを行っていた。

しかし、徐々に監視がきつくなり手紙のやりとりにも不自由をきたすようになりだした。そしてサド自身にも変化が起き、小説家として、そして何より劇作家としての成功を夢想し始めたことで、この旅行記は結局それでもかなりの量の清書とメモのまま残されるに終わり、書物の姿をとることはなかった。

*

こうして残されたものが草稿としてモーリス・ルヴェの手によって『イタリア紀行』*Voyage d'Italie* の名前で出版されたのが1995年であった。この書はルヴェの序文、旅行紀本文、用意されはしたが使用されないままに残ったメモから構成されている。

まず本文についていえば、サドが辿った具体的な経路や距離関係、その際目にした土地土地の風景、宿泊している場所の様子、また訪れた教会などの建築、目にした各種の芸術作品、都市の風俗、行政形態などについてのいくらかくくだしい説明が続いていく。その記述の仕方はおおむね客観的で、冷静な観察者という立場からのものである。しかしところどころ熱気を帯びる部分がある。たとえばそれはサドが参照しているはずの種本の作者たちに対して非難を浴びせるときである。記述が誤っている、意見が平凡である、他人の著作を引き写しているだけで自身の目で

見て確かめてはいない、等々。しかしこうしたことは実はサド自身にもいくらか当てはまることであって、特に建築物や美術作品について述べるサドの語彙は貧困を極めており、それは同時にサドの鑑賞眼のなさの証明にもなっている。とはいえそれでも、本文はイタリアの文化的中心地ともいえる各都市を巡り、様々な芸術的作品、最新風俗を伝えているという点では、18世紀に流行した旅行記ブームの一翼をなすありふれた一書であったであろう。

そうした本文にたいして、メモのほうには独特の性格が備わっているといえる。というのも、残されたメモにはもちろんこれから執筆に利用される素材があるのは当然であるが、清書された部分と比べてみると本文とすべく用意されていた文言であってもそのままのかたちで使われなかった部分というのが現れてくるからである。これは主に出版される場合のことを考慮して過激な部分を削除あるいは変更したためである。つまりメモは本文に対して素材としての側面を持つとともに削除されたものの保存場所という側面も持つことになる。

*

全体としては素っ気ない本文と過激なメモ、という言い方をすればサドの読者であれば誰もがメモのほうにサドの本来の姿を求めようとするだろう。次のような本文からは削除された過激な表現を読めばそう思うのは当然なことだろう。

l'art de chirurgie : art nécessaire à la conservation humaine, et pour la perfection duquel une expérience faite en l'état de vie éclairerait peut-être une immensité de doutes et de conjecture, qui ne le seront jamais par la sottise et ridicule timidité qui empêche de sacrifier un manant dont la vie n'est utile à rien, pour apprendre peut-être de conserver celle de cent mille sujets utiles à l'État. Mais nous n'en sommes pas encore au point de philosophie nécessaire à cette tolérance utile, et il vaut bien mieux permettre à la justice d'assasiner annuellement cinquante ou soixante mille citoyens...

[VI, p. 368]

これはいかにもサド的な、残虐趣味を湛えた思考であり表現である。そして『イタリア紀行』校訂者モーリス・ルヴェもメモに注目し、のちに現れる過激作家サドの源泉をここに見出している。

ルヴェは主に1797年のサドの小説『ジュリエット物語、あるいは悪徳の栄え *L'Histoire de Juliette ou les prospérités du vice*』との比較から『イタリア紀行』が『ジュリエット物語』の先行形態あるいは資料になっていると述べる。確かに、『ジュリエット物語』が主人公たちの旅行を追う作品であり、そのイタリアに関する記述が『イタリア紀行』にみられるサド本人の旅程とほぼ同一であり、イタリアの人、文物をのべる言葉も同様であるというルヴェの指摘からすると、『イタリア紀行』から『ジュリエット物語』への連続性、というその主張にも説得力があり、また、以下の両作品の比較からは、確かに表現に慎重な『イタリア紀行』のなかにはあけすけな『ジュリエット物語』を書くことになるサドがすでにいる、というのもうなずける。

« On remarque en général ici un grand penchant pour trahir son sexe. Les femmes s'arrangent assez volontiers comme les hommes et les hommes comme les femmes. Irons-nous jusqu'à dire que cette manie leur vient du même principe qui faisait autrefois dans Rome et dans la Grèce confondre les sexes et les déshonorer tous deux ? » (*Voyage*)

« Les mœurs sont très libres à Florence. Les femmes se costumant comme des hommes, ceux-ci comme des filles. Il y a peu de villes d'Italie où l'on aperçoit un penchant plus décidé pour trahir son sexe, et cette manie leur vient assurément de l'extrême besoin qu'ils ont de les déshonorer tous deux. » (*Juliette*)

« De mauvais plaisants dans le pays assurent qu'ils [les Florentins] obtinrent autrefois des papes une indulgence plénière pour ce crime. » (*Voyage*)

« Les Florentins, passionnés par la sodomie, obtinrent autrefois une indulgence plénière des papes pour ce vice. » (*Juliette*)

« Ce qu'il y de sûr, c'est que celui-là, l'inceste et l'adultère, et en général tous les délits de l'impureté, ne sont point à Florence des cas réservés. » (*Voyage*)

« L'inceste et l'adultère s'y montrent également sans aucun voile : les maris cèdent leurs femmes, les frères couchent avec leurs sœurs, les pères avec leurs filles. » (*Juliette*)

« On m'assura encore à ce sujet qu'il était d'institution fort ancienne que, le Jeudi gras, les femmes devaient *sans exception tout accorder à leurs*

maris. » (*Voyage*)

« Il y avait autrefois, à Florence, une loi fort singulière à ce sujet. Il était impossible, le Jeudi gras, qu'une femme refusât la sodomie à son époux. »
(*Juliette*)

« En cas de refus de leur part, ceux-ci pouvaient s'en plaindre ou les y forcer. » (*Voyage*)

« Si elle s'en avisait, et que celui-ci s'en plaignît, elle risquerait de devenir la fable de la ville. » (*Juliette*)

[Maurice LEVER, *Introduction*, VI, p. 35–36]

しかしこれらは『イタリア紀行』から『ジュリエット物語』への移行というよりも、後者から前者への遡行であるように思われる。つまり、小説家サドから旅行記作者サドを読みとっているのである。実際のところこうした類似箇所を見つけだすにはこれら二つの作品を丁寧に、細部に至るまで読み込むことが要求されるであろう。しかし、そのための視点は至って単純で、『ジュリエット物語』を書いたサドを『イタリア紀行』の中に探す、というものである。しかしこうした直接的な読解では、紀行文から小説への本来のサドの飛躍が見落とされたまま、それをたどることができない。

*

そこで、改めて本文を読むことにしたいのだが、その前に一つ確認しておきたいことがある。18世紀には旅行記が流行していた。旅行してきた人がそれによって得られた体験や情報を盛り込んで一書をもつのであるが、このジャンルにはいくつかの役割があった。まず、体験記であることからそれは同時に後続者への手引きとなり、次の旅行者を生み出していった。つまり、旅行記を読んだ人が今度は自分が旅行者となるのであり、そうしてまた旅行記ができあがり、それからまた人を旅行者に仕立て…という具合だ。次に、最新情報の伝達の役目である。当時のことであるから何日も何週間もかけて移動していく。ふつう旅は数カ国に及び、期間も1～2年になるのがふつうであった。その間旅行者は各国の情報を収集し、それを帰国後に披露したのである。そしてもう一点、それは教養の顕示ということである。各地で様々な人との知遇を得、あれこれの芸術作品にふれて見る目を養うことも旅行の重要な目的であった。さて、このような旅行は当然、一定の社会階層の人たちに限られていた。それは大商人であったり、なにより貴族であった。こうした富裕層

の子弟たちがそれまで受けてきた教育で得たものを実践し仕上げるための過程として旅行が行われていた。これを称して、イギリス人が大陸を周遊したことから、グランド・ツアーという。

では、サドのイタリア旅行はやはりこうしたグランド・ツアーであったのか、『イタリア紀行』はその産物であったのか。モーリス・ルヴェは、サドの旅行は逃避行であったがゆえに通常のグランド・ツアーではない (VI, p.5-6.)、といい、しかし、『イタリア紀行』はグランド・ツアーの旅行者による旅行記と変わるところがない (VI, p.36)、という。しかしここでは、サドの旅行はやはりグランド・ツアーであった、と断言してもよいだろう。というのも、サドが逃避行の地に選んだのが、司直の手から逃げおおせられる場所ではなく、イタリアだったからである。このことには先ほど挙げた旅行記の三番目の役割が関係してくる。旅行によって教養を磨き、とりわけ芸術に対する理解を深めようとなると、その目的地はどうしてもイタリアになるしかなかったからだ。例えば、フランスのアカデミーは芸術家になるための要件としてイタリアでの修行を必須としていたし、そのためにローマに支部を作って留学生の受け入れにあたっていた。そうしたことなどを考えあわせると、通念上求めるべき最新情報のある場所、教養錬磨の場所としてのイタリアという位置づけが確立していて、サドも時代のそうした常識を共有していたとしても自然なことである。つまり、サドの旅行をイタリアへと動機づけていたのは自己修養としてのグランド・ツアーの一般的形式だったといえるだろう。

*

イタリア、特にフィレンツェとローマに滞在したサドは数多くの絵画、彫刻に接しており、それらに対する評言を書き付けているが、そのほとんどは具体性を欠いている。いや、具体性を補うかのような詳細さはあっても、サドの目指したような *philosophe* らしい評言にはなっているとは言い難い。それには、ルヴェによれば、時代の制約もあった。つまり、当時はまだ、デイドロを除けば、美術批評といえるような言葉のあり方がなかったために、サドの美術批評の貧しさは彼一人のもではなかったというのである。

On voit dans cette ville plusieurs belles places, de belles statues, plusieurs colonnes et morceaux antiques, un arc de triomphe superbe, quoique moderne, fait pour l'entrée de l'empereur, une grande quantité de monuments publics consacrés à la santé, aux arts, à la religion et aux

sciences, et en général une infinité de **belles** choses qu'un curieux ne saurait examiner avec trop de détail.

[p. 56、強調引用者]

これは対象の美的特質を述べようとしても述べきれていないサドの典型的語彙僅少の例である。ここでは beau や superbe の語が繰り返し用いられ、またほかの箇所ではそれ以外に de la grande beauté といった表現も繰り返し用いられていくが、しかし、そうした美しさ、すばらしさの拠って来る要因がいかなるものであるのかの具体的な指摘はなく、そうした決まり文句以外に用いられる記述の言葉もそれが具体的に何を指しているのかが曖昧なままである。

こうしたサドの曖昧で空疎ともいえそうな用語法は最初の長編小説への試みである『ソドムの百二十日』にも見られる。冒頭に置かれた登場人物を紹介する箇所以下のようにある。

CONSTANCE, femme du duc et fille de Durcet, était une grande femme, mince, faite à peindre et tournée comme si les Grâces eussent pris plaisir à l'embellir.

[Œuvres, tome I, p.33.]

ADÉLAÏDE, femme de Durcet et fille du président, était une beauté peut-être supérieure à Constance.

[*ibid*, p.34.]

しかしこれらの紹介を読んでも、これらの少女たちが本当に美しいのだと納得できるだろうか？ Constance がどのような美を授けられているのだろうか分からないところに加えて、Adélaïde がその Constance より美しいといわれてもなにも伝わってくる内容がない。サドは美を希求し訴えようとしていても、それに具体的な像を与えて伝える術を持たないように見える。

それでも、『イタリア紀行』における beau や superbe といった語彙はサドがそういつてよいと思える対象に用いられているはずではあるから、そこにサドの主観的判断の働いていたことを認めることはできるであろうし、また、グランド・ツアーの旅行者らしく素養を高め鑑識眼を涵養しようとする姿を認めることもできるだろう。そしてそれに加えてもう一つ注目すべき系統の語があることを指摘したい。それは「快い agréable」である。

Sienna est d'ailleurs une ville assez **agréable**. La tranquillité qui y règne est faite pour plaire à tout plein de gens et je ne m'étonne pas que plusieurs personnes viennent s'y fixer. L'air y est pur, la campagne **agréable** et la société douce.

[VI, p. 78、強調引用者]

語の用いられ方からすると、これも beau や superbe と同じように繰り返し用いられることでサドの語彙の貧困さを証するものの一つであるとはいえるであろうが、agréable は beau や superbe よりもサドの個人的感想、心理状態のようなものを言い表しているような印象を受ける。両者の違いをより際立たせたものにしてみるなら、beau や superbe はそれが与えられただけで対象への一定の評価を自動的に保証してしまうよそよそしい語彙であるのに対して、agréable は受動的主体の心理的ときには身体的な変化を述べようとする個人的な語彙である、といえるだろうか。

この場合もちろんのこと、受動的主体とは様々な作品を前にしたサドのことであるが、しかしサドはその地位にとどまり続けはしない。つまり紀行文をしたためることで旅行者という受動的主体から執筆者という能動的主体の地位にうつったのである。しかしそれだけでは同時代のあまたいる旅行記作者と径庭がないが、サドの場合、そののちも執筆者としての地位を保持し続けていく。つまり、作家サドとしての能動性の持続である。

すると、受動的主体の地位が空白となるように思えるが、作家サドの去ったその地位にはわれわれ読者が交代することになり、実質的にサドの能動性が保証される。そしてサドはその自らの地位に対して非常な優越性を与えようとする。既に述べたとおり、サドは先行する旅行記作者に対して理不尽なまでの非難を浴びせかける。これは『イタリア紀行』を類例のないものにした、というサドの野心に呼応するものではあるが、それと同時に、いやそれよりむしろ、揺るぎなき優越した地位に自らを就かせようとする願望の現れであるように思われる。そしてこの願望の別のかたちでの現れとして、優越する者が教える者として振る舞うような「学校」として構築された作品を挙げることができるだろう。すなわち、『ソドム百二十日、あるいは放蕩学校 *Les 120 journées de Sodome ou l'école du libertinage*』と『閨房哲学 *La Philosophie dans le boudoir*』である。その両者においては、圧倒的優位に立つ者たちが圧倒的劣勢に立つ者たちに自らの信念を語ってきかせ、また、その信念に基づく行動をとってみせる。つまり「教育」を行おうとするのである。そしてこの教育はこれらの作品に限られるわけではなく、ポルノグラフィには不要なサド作品にはつきものの登場人物たちの交わす長々しい議論もそうした教育の一

部であり、優位対劣位の組み合わせは悪徳対美德として変奏され続けていると考えてみると、この教育者的優越性はサドの小説作品に広く認められるものである。つまりサドは旅行記作者から小説作者へと、自らの優位性を強化しつつ、移行していったのである。

*

では、教育者サドが教えようとしたことは何だったのか。これは簡単にいってしまえば、人は自然を知り自然に従え、ということであろう。そしてその時いわれる自然とは plaisir を求めようとする傾向のことでもある。つまりサドは、社会の虚妄を暴き人間本来のあり方を論理と感覚・官能の刺激によって感性のあり方を導くものとして自らを任じていたように思われる。

この教導者サドを支えるあの優位性が何に由来するものなのかは後日の問題にすとして、『イタリア紀行』を通して見えてきたサドの姿を整理しておこう。

この書物は、当時にはある程度常識的であったグランド・ツアーを実質とするサドのイタリア旅行をきっかけに書かれたものであり、その産物としてのありふれた旅行記にとどまるかもしれなかったものから、サドは独特な「教育者」としての立場を作り上げ、その立場をとり続けながら小説家になっていったのであった。

今回は『イタリア紀行』というサドの小説家以前の作品を取り上げて、その後の小説作品との関係を見てきたわけであるが、まだグランド・ツアーとしてのイタリア旅行がサドにどのような意味を持つものであったのかの具体的論述までに至らなかった。そしてそのことに加え、サドがとる優越者としての立場やそこから生み出される残虐性の問題なども『イタリア紀行』にヒントがあるように思われることなどは、後日に期すことにする。

註

本文中の引用文の後の [] で示された出典は以下のものである。

VI : D. A. F. marquis de SADE, *Voyage d'Italie*, édition établie et présentée par Maurice Lever, Fayard, 1995

Œuvres : SADE, *Œuvres*, tome I, édition établie par Michel Delon, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1990.